

聖書入門講演会

聖書と日常生活

1992年11月28日（裾野文化センター）

奥田 昌道

キリストとのかかわり 主の招き 一日一生 砕けの魂、幼児の心 恵福なるかな、霊の貧者
永遠の生命 愛 主は我が牧者 天国の姿 祈り

●キリストとのかかわり

皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました奥田と申します。何人かの方は存じあげているのですが、今日、初めてお目にかかる方もいらっしゃると思います。私は松井兄がご紹介下さったように、1932年生まれで、ちょうど今年が干支（えと）の年、60歳になりました。でも、気持ちの上では、まだまだ若くて、今は七掛けをすれば良いといえますから、まだ42歳、そんなところです。

松井兄の作成された皆さまへのご案内にも

「聖書にあふれているイエス・キリストの愛と生命を日常生活に実践してきた」

と書いていただきましたが、実践してきたというより、私にとりましては、イエス・キリストという方を聖書を通して知ったわけです。キリストは聖書の中から出て来られて、私の体の中に入って下さった。

よく絵本を見る時でも、絵本の中から絵が立体的に出てきてお話をしたり、体に入ったりということがありますね。おもちゃの兵隊などは、夜、寝ている間にいろいろ遊びをしているとか。聖書とはそういう本だと、つくづく思います。

今日は、「聖書と日常生活」という題ですが、私にとりましては、聖書は日常生活そのものだと思っています。もし何か特別高尚な事が書いてある、神棚に祭っておく本だと思っておられたら、それは大いなる誤解です。だいたい、イエス・キリストはそういうお方ではない。キリストの伝記を書いていますのは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四つの福音書ですが、キリスト御自身は一冊も本をお書きになりませんでした。弟子たちが書いたわけですが、福音書の中に出てきますキリストの姿は、日常生活そのものなのです。ところが、当時の宗教家とか、パリサイ人（びと）とか、聖書学者（りつぽう）（律法学者）は何か特別な勿体（もったい）ぶった、いかにも重々しく、それこそ、ガウンを着て帽子を被（かぶ）つてという宗教的なことをやっていないと、神の国は遠いと思っていた。それをキリストは日常生活の中へすつと入って来られて、普通の人と一緒に生活をされて、人々をどんどん天国に連れて行くということをなさったものですから、今まで、聖書、神の国、これは特別なものと思っていた人たちからすると、



割に合わないわけです。「我々が営々として築いてきたものは、何だったのだろうか。こんな素人のイエスを、はびこらしておいたのでは我々は飯の食い上げだ」ということで、キリストは殺されてしまったわけです。私は本当に聖書を虚心坦懐に読めば読むほど、親しみをもちます。ですから、聖書は日常生活そのものであると、そういう思いで読んでいたみたいです。

そうでなければ意味がない。学校の勉強なら、やれば少しはパンの足しになるかも知れませんが、聖書はパンの足しになるようなものではない。ところが実際は聖書を通してキリストというお方が自分の中に入って来て下さいますと、ものすごくパンの足しになるのです。なぜかといいますと、病気はしない、薬代は要らない、時間は節約できるし、毎日が楽しい。

なぜ、私はそうなったかと言いますと、様々な囚われから解放されたのです。

私は若い頃はすごく神経質で、責任感がすごく強かった。それから先生の言うことは、全部守らねばいけないと思っていました。だから、親孝行は絶対しなければいけない、いや、しないではいけないという、そういう意味では親から見れば良い子だし、先生から見たら勉強家だし、悪いことはしないし、それは優等生だと思われていたけれども、自分ではしんどくつてしやうがなかった。非常に責任感が強ければ強いほど、自分の弱さというか、自分ではこんなことはとてもできない、明日はどうなるのだろうか、自分自身の思い煩いが多い。明日、その次、その次と、それをしつかりと背負っていけなければ責任を果していないと思った。ところが、私が24歳の時に、キリストのところへ招かれました。もうそのころは本当に沈没寸前、いやもう沈没していたのです。その時に、どなたでも良かった。「任しておけ、お前を救ってやるからついて来い」

と、そういう権威ある言葉を私は求めていた。その時にちょうど良い友だちに会って、「奥田君、どうしてそんなに自分で背負いこんで苦しんでいるの、何も心配しなくて良いよ」

と言って下さった。しかし、気休めにそんなくだらないことを言うなあという気持ちです。けれども、その人はそう言いながら、輝いている。それでいろいろお話を聞くと、ああ、そうかと思いました。それでぶつかったのが、

「明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり」(マタイ6・34)

でした。私はもう、どなたでも本当に「全責任を持つからついて来い」と言って下さる方があったら、「はい」とついて行きたい心境でしたから。そのときに声をかけて下さった方が主イエス・キリストだったので、とても良い方に巡り会ったわけです。それ以来、勿論戦いがありましたけれども、だんだんもう、本当に身軽にされ、苦にしくなっていて、囚われがなくなりました。60歳にもなれば、そうなるのだとは思いますが、悩み多き青春時



代を過ぎ去って、いつまでも悩んでいたらどうなるのだといわれるかも知れませんが、私はこのキリストが本当に自由の世界に入れて下さったと思っています。

それで、松井兄がさきほど、「今朝4時まで仕事を私がやっていた」と言われたのは、これ（レジメ）を作っていたのです。昨日、12時頃まで他の用事がありまして、大学の関係のことをきちんと済ませて、それで今日の資料を作ろうと思ったら、もう12時になっていた。けれども、私は今日の皆様に本当にごちそうを差し上げたいと思って、この聖書の中からここぞという一番良いごちそうを、しかも入門講座ですからどなたでもすつと入っていけるところを、私なりにピックアップしました。二つの聖書を使いまして、文語訳の小型聖書ですけど、拡大コピーしまして、それをハサミで切って貼りつけて、だから、跡が残っているでしょ。まさに手作りの作品です。これは何となく並んでいるようですが、きちんと順序だてて並べてあります。そんなことで終わったのが3時くらいでした。後少し、いろいろなことをしていますと、もう寝るのが4時になってしまったのですが、やっていることが楽しいので、全然苦にならない。明日、皆さんにどんなごちそうを出せるかな、みんなと一緒に食べたら、おいしいだろうなあという思いでございました。ですから、そういう私の日常生活ぶりをいろいろとお話の中に織り込みながら、皆さんと一緒にこのごちそうをいただきたいなあという気持ちがいえます。

なお、マラソンのお話が出てきましたが、私は3回目なのです。去年の3月に篠山へ初めて行きました。そのときはベテランの方に付き添ってもらって走り、一応完走できました。今年の3月は、「お前は一人で走れ」と言われて、一人立ちしました。やはり、完走できました。どちらも3時間49分で走れた。それで11月23日、勤労感謝の日にも去年も行きたかったので、去年は教え子の結婚式がありましたので、行けませんでしたが。今年は、はるばる福知山へ前夜から行きました。ちょうど、お友だちがいてくれたものですから、それでとても楽しく走れまして、3時間42分と、7分アップしました。

その他、水泳は7年前から始めました。法学部長の仕事が終わりましたのが、昭和60年だったものですから、それから水泳を始めました。なぜ、水泳を始めたかと言えば、私の先生の小池先生は水泳がお上手なのです。私はコンプレックスを抱いていた。先生のお話の中にいつも水泳のことが出てくるから、これはやはり、先生に負けられないと思いまして始めました。

走るのになぜ、始めたかといいますと、八尾高校の2年生の時、家内と同じ高校なのですが、1年生から男女共学となり、恥ずかしいから運動会は休んでしまった。2年生になって運動会に出たいと思ったら、もう出る種目がない。みんな猛者ばかり揃っていますから、私なんか出してもらえない。悔しかったですね。だから、運動会が終わった明るる日から毎朝、薄暗い間に起きて走った。家の近所の国道を3〜4km、1年続けました。そうしたら3年生の秋の運動会は1500mに出ましたし、スウェーデン競争のアンカーとして400mを走



りました。もちろん1500m走りましても、サッカーやラグビーをやっている人には敵いませんが、いわゆる素人の中ではそこそこですから、全体で学年で6番めぐらいですかね。そんなことで走り、そのときから、病みつきになりました。機会があれば走っていた。京都でも鴨川^{かもがわ}という素晴らしい川が流れていまして、それをずっと上流に走って行きますと、とても景色が美しい。桜の頃、紅葉の頃、北山が実に美しい。東山^{ひがしやま}もきれいで、本当に天国だという思いがします。そんなわけで、私はずっと一人で走ることを続けてきたのですが、今から2年半ほど前に、「火曜日の夜に御所^{ごしよ}を走る会」というおもしろい名前の会のメンバーの方から、「その会で走りませんか」というお誘いを受けて、その会に入りました。それで去年の3月にマラソンに連れて行っていただいたという次第です。水泳をやり、マラソンをしていますと、だんだんお友だちの輪が広がってくる。本当に楽しい。とうとう今年は、家内を福知山まで引っ張っていきまして——走るのではないですよ、応援です——応援に来てもらうと、その前で恥ずかしいことは出来ませんから、張り切るわけです。今年は35kmぐらいまでセーブをしていましたが、それを過ぎてから、もうもり元気が出て来ました。これは実は皆さんが祈って下さったおかげだと思えます。

昔なら、私は何時間眠らなければ頭がどうの、体がどうのと思いましたが、この頃はそれがなくなりました。それで眠りが少ないときも、それが溜^たまってききますと、どこかでふつと時間のできたときにぐっすり眠る。これだけは皆さん、なさって下さい。体の要求を大事にしないといけません。無理をしなければならぬときに無理をきいてくれた体だから、休めないという方はお酒でも飲まれて、体をほぐしてぐっすり眠ることが大切です。

働くにも遊ぶにも眠るにも、何をするにもそこに、私の体の中に主イエス・キリストが住んでいて下さると思っています。そう思いますと、何か内側から、明るく光が射^さしてくるような思いになるのです。

私はいわゆる宗教体験はない。パーツとキリストの御姿^{みすがた}が現れたとか、御声^{みこえ}が聞こえて来るとか、そういうものは何もない。けれども、何かキリストのことを思うと、思わず、「主さま！」と、叫んだりする。マラソンで走っていても、いつのまにか、「主さま、主さま」と言いながら、走っていたりする。そういうことでまさに私の生活の中にキリストは入ってしまっただけでした。ですから全部そこにお預けなのです。

仕事だって、なかなか、かくありたいと思うようにはいきません。大学の授業だって、東京で会議があつて夜帰って来て、明るく日の授業の準備ができない。それでそのまま、教室へ行くのはつらい。登校拒否の子の気持ちがかかります。でも、私は自分を責めない。全部預けっぱなしです。失敗しようと良くできようと、何をしようと。人はいろいろ言うでしょう。けれども、私はそれは一切知らない。ちょうど、今日の讃美歌にありました。「主に委^{ゆた}ねまつり」と、これが一番楽です。本当にこれは楽です。私はこの285番が大好きな歌で、何年も前から、これを良く歌っている。



「主よ、み手もて

ひかせたまえ、

ただ我が主の

道を歩まん。

いかに暗く

険しくとも、

みむねならば

我いとわじ。」（讃美歌285番1節）

今度、小池先生の『エン・クリスト』（53号1993年1月冬季号）という雑誌に書いた私の文章に、「天命を知る」という題をつけました。また、皆さん、読んで下さい。まるで孔子か何かみたいです。私は60歳ぐらいになってからでしょうか、だんだんそう思えてきた。自分でじたばたしても始まらないと。仕事だつて今のポストだつて何だつて、家庭だつてすべては主が備えて私に下さったものだから、それを自分の判断できついただとか、汚いだとか——「三K」というそうですが——自分でいろいろ文句を言っていると自分自身の中で毒素がでてきます。

「あなたが下さったものなら、あなたがちゃんと責任を持って下さいますから、人の目からはどう見えようと、私はいつも主さま、あなたと対話をしてあなたとの関係で生きていきます」

と。その意味ではこの世の関係に対して、距離をおきます。

だから、何と言われようといい。ぼろくそに人から言われようと、主は慰めて下さる。人が認めてくれなくとも、主は「よくやった」と言つて下さる。「はい、それで充分です」と。何かそういうふうに主イエス・キリストといつも心の対話をしながらやっている、楽しくなってくる。

私だって、あと40年したら向こうに行くかも知れません。あつかましいですか、40年なんていうと100歳です。そのぐらい経つと向こうに行くかも知れない。そのときは

「おう、来たか」

と言つて、マラソンのゴールで待つていて下さるように主は迎えて下さる。そういう感じである。ちょうど42km走つて帰つて来た時迎えてくれたように、「来たか」と言つて待つていて下さる。だから、讃美歌370番「めさめよ、わが霊」の歌が好きです。すべてがそういうふう、キリストという方が私の生活そのものになつて下さっています。

「ちから頼み

知恵にまかせ、

我と道を

選びとらじ。

ゆくてはただ

主のまにまに

委ねまつり

正しくゆかん。」（讃美歌285番2節）

自分から自分で道を選びとることをしない。自分の力とか、自分の知恵に頼ることはしない。主のまにまに委ねまつつた道が正しい道なのです。

正しい道を行けば、主に出会うのではなくて、主に委ねて歩んだ道が正しい道です。

「主よ、飲むべき

我がさかずき、



選びとりて

さずけたまえ。

喜びをも

悲しみをも、

満たしたもう

ままにぞ受けん。」（讃美歌285番3節）

これは実はキリストのことを歌っている歌です。

「父なる神様の御旨みむねに従って十字架であろうと、私はそれをお受けします」

というキリストの御姿なのです。今度は私たちは主イエス・キリストに対して「主よ」と呼びかけているわけです。

「この世を主に 捧げまつり、

神の国と なすためには、

責めも恥も、 死も滅びも、

何かはあらん、 主に任せて。」（讃美歌285番4節）

神の国というのは、どこか遠い処にあるのではなくて、キリストがいらつしやる処が神の国、御国みくにだと思います。だから、キリストは、

「あなた方の中に御国は来ているのだよ」

と、おっしゃいました。愛の支配している処が御国です。コルベ神父というお方がアウシユビツツの中で自分を捧げられましたね。あれが御国なのです。みんなパンがない。餓鬼がきになっている。

「やはり、人間というのはこういう極限状況にきたら、もうだめなのです。こん

な処には愛も何も無いではないですか」

と、囚人が言った。

「愛が無ければ愛をつくりだそうではないか。愛は神様から流れてくる。だから愛がここに無ければ、愛の主^に愛を下さいと祈ろうではないか」

とコルベ神父は言った。そして、彼は自分のパンを与え、最後は自分の生命を与えました。それが神の国であり、御国なのです。

●主の招き

それで今日のお話は、せっかくプリントを作りましたのでこれに従いまして、聖書に親しみながら、皆さんと味わっていきたいと思います。まず、私は「主の招き」というのをトップにもって来ました。さきほど、読んでいただきましたが、マタイ伝9章とルカ伝5章が対応している。四つの福音書を私は最初のうちはあっちを開いたり、こっちを開いたりして、ところどころ食い違っていたりすると、気になって仕方がなかった。それで聖書をお読みになるときは、どういうふうに読んでいったらいいかと言いますと、たとえば同じことを扱っている箇所をコピーして上と下に貼るのです。そうすれば、違いも分かります。それではどういう心でこの違いが出ているのだろう、マタイは、ルカは、どういう気持ちでこ



を書いたのだろう。そういう読み方をすればとても味わい深くなります。

まず、マタイの方で読みますと、マタイ伝を書いたマタイはもともと取税人^{しゅぜいにん}だったようです。マタイという人が取税所に坐っていた。取税人というのは、当時ユダヤはローマの属国ですから、人々から税金を取り立ててはローマに収めるわけです。そして上^{うわまへ}前をピンハネして、自分の手数料にしていた。しかも取税人の多くは必要以上に取り立てては、自分の懐に入れて私腹を肥やすということがあったので、とても嫌われていた。愛国^{うけこころ}という面からみますと、ローマは敵国、その手下になって人々から巻き上げて自分を膨らませているということと、とても軽蔑された。マタイはどういう取税人だったかは分かりませんが、とにかく取税所に坐っていた。キリストはマタイに、

「我に従え」

とおっしゃった。そうしたら、すぐ立って従った。ルカ伝では、

「一切を棄ておき、起^たちて従えり」

と書いてあります。「一切を棄ておき」というのがルカ伝には入っており、しかもレビという名前になっています。

「レビ」が家にて、イエスの為に大なる饗宴^{けうえん}を設けしに」（ルカ5・29）

「家にて食事の席につき居給^{おきて}うとき、視よ、多くの取税人・罪びとら来^{きた}りて、イエス及び弟子たちと共に列^{つらな}る。パリサイ人これを見て弟子たちに言う、『なに故なんじらの師は、取税人・罪びとらと共に食するか』」（マタイ9・10～11）

この「取税人・罪びと」といいますのは何も罪を犯した人というわけではありません。当時は神の掟^{おきて}であるモーゼの律法^{おきて}やいろいろな宗教的な律法がずっとあるわけです。それを一生懸命、勉強しなければ神の国とは縁が無いと言われていた。それで文盲の人たち等は律法というものを知ることができません。だから罪びととして排斥されたわけです。下層階級という、そんな意味を込めています。取税人とか、律法を知らないような罪びとたちは神の国に遠い。のみならず交わるならば、朱に交われれば赤くなるで、汚^{けが}れると考えたのです。自分等は清らかな世界に生きなければならぬ、それがパリサイ人。「パリサイ」というのは「別^{わか}つ」ということです。これは清い、これは汚れていると、二つに別つということです。ところがイエスはそういう取税人・罪びとの中にどんどん入って行って、お友だちになられるものですから、パリサイ人はつぶやいたわけです。これに対するキリストのお答えは、

「『健かなる者は医者^{あわれみ}を要せず、ただ病める者これを要す。なんじら往きて学べ』『われ憐憫^{あわれみ}を好みて、犠牲^{いけにえ}を好まず』とは如何^{いか}なる意^いぞ。我は正しき者を招かんとにあらず、罪びとを招かんとて来^{きた}れり』」（マタイ9・12～13）

マタイ伝にはよく旧約聖書の引用があります。マタイは主としてユダヤ人を対象として福音書を書きました。ですから、

「旧約聖書のモーゼの律法^{おきて}にはこう書いてある。しかし私（キリスト）はこう



「言う」

と。キリストの言葉でも、いろいろ旧約聖書の教えと対比して出てきます。ここでも、

「われ^{あわれみ}憐憫を好み、犠牲^{いけにえ}を好まず」

と、これはホセア書に出て来る言葉です。要点はまさにこの通り、

「医者が必要なのは病人だ。ピンピンしている人間には医者是要らない。同じように、私は何の為に来たかといえば、私に用があるのは罪びとなのだ。いわゆる義人ではなく、お前たちが罪びとと言って蔑^{さげす}んでいる人たちこそ、私は招こうと思つてやつて来た」

とあります。

「健康なる者は医者を要せず、ただ病^{やまい}ある者これを要す。我は正しき者を招かんとあらで、罪びとを招^くきて悔改^くめさせんとて来^{きた}れり」（ルカ5・31〜32）

罪びとというのはさきほどのように神の律法^{おきて}に遠い者、そこからさらに広がりまして、やはり罪を犯した人とか、自分は神の前に立てないと自覚している人、そういう広い意味になつていきます。要するにキリストは、

「自分で立派だと思つている人には私は用がない。自分の病^{やまい}を知っている人、内的な病、神様の前に自分は病める者、自分は神様の前に立てないという自覚症状を持っている人、そういう人を招いて、神様の処に連れて行く」

と、おつしやつています。

ここに「悔い改め」という言葉がありますが、後悔という悔い改めではなくて、むしろ、生活をひっくり返す、今まで別の方向を向いていたのを、神様の方に向きを変えることです。ちょうど、ひまわりや朝顔がずっと太陽の方を向きますように、心を太陽に向ける、神様に向ける。そうしますと光が流れてきて、健やかになっていきます。聖書の言葉というのは、すべて神様の方のそういう癒^いしの力、救いの力、ひっくり返す力、それを伴つてやつて来ている。病人に立ち上がれというのはむちゃな話です。

病人にもしキリストが

「立て」

とおつしやる時には、言葉と一緒に力が来る。だから、

「はい」

と言つたら、立つてしまう。どんな言葉もこれはキリストの力のこもった言葉として、お受けとりいただきたい。我々に無理難題を押し付けている言葉では絶対ない。ただ己^{おの}が力でやろうとすると、無理難題になります。けれども、

「私はそんな大変です。とても神の国なんて入れるような人間ではない」
と思つている人には、ものすごい恵みなのです。

だから、キリストの方から招いている。マタイは何も善いことをしたのではない。マタ



イは取税人の生活が嫌になり、足を洗いたいと思つていたのでしょう。その心をキャッチされて、

「我に従え」

とおつしやつた。そして一切を棄て、^た起ちて従つた。そして、レビ（マタイ）はイエスのために大いなる饗宴を設けた（ルカ5・29）。ということは、過去の生活にさよならする。今までの取税人の同僚仲間たちに、さようならを言うために饗宴を設けた。そして、イエスをお迎えした。私たちもそうなのですね。この招きをいただいたら、右手は招かれて、左手は向こうを向いているというわけにはいかない。全身でイエスか、ノーか、どちらかなのです。徹底的にノーと言いつけるか、徹底的にイエスと言うか、中途半端が一番いけない。それでここに、

「一切を棄ておき、^た起ちて従えり」

と。レビ（マタイ）はもう、行き詰まっていたから、従えたのです。レビが立派だから従つたのではない。従わざるを得ない状況にいた。そこをキリストがパツとキャッチされた。私も24歳の時に、従わざるを得ない状況に追い込まれていた。毎日、朝目覚めると、気が重い。一日が始まることがつらい。思い煩いといろいろなことに^お圧し潰されていました。そういうときですから、私はちやうど、このマタイあるいはレビです。そのときにちやうど声をかけていただいた。

それから、マタイ伝第11章、主があちこち伝道なさつても、なかなか人々はキリストを受け入れない。どんな奇跡の業を^{わざ}なさつても、力ある業をなさろうと、だめだった。それで失意のイエス様というか、イエスも人間だから、やはり、悲しかったのでしょうか。そういうときに、「その時」と福音書では続いているのですが、神様の慰めがきたのです。イエス様が本当にながかりなさっているときに、神様から声が聞こえて来た。それに対して、

「はい」

と、お答えになった。

『天地の主なる父よ、われ感謝す、^{これら}此等のことを^{かしこ}智き者^{さと}慧き者にかくして、^{みどりこ}嬰兒に^{あらわ}顕し給えり。父よ、然り、かくの如きは^{みこころ}御意に適えるなり。すべての物は我わが父より^{ゆた}委ねられたり。子を知る者は父の外^{ほか}になく、父を知る者は子また子の欲するままに^{ゆた}顕すところの者の外になし』（マタイ11・25〜27）

何百人の人がキリストに出会い、キリストの話を聞いても本当に受け入れたのは何人だったか分かりません。病気のひととか、いろいろな人が癒しを受けました。癒しを受けたら、ありがとうございましたと、それだけなのです。本当にキリストの一番伝えたいことをしっかり受けとった人は、意外と少なかったはず。イエスが伝道すればするほど、敵が増えてきました。そういう状況の中でこの言葉が語られていると思う。所詮、神の国、神の生命、父の御旨は人の思いで伝わるものではないと。神様がこの者と本当にハートを^{つかま}捕え



て下さった者だけが、神の者として招かれる、あるいは受けとられる。

「招かれる者は多いけれど、選ばれる者は少ない」

という言葉がありますが、たくさんの方を招いていらつしやるのだけれど、本当にキリストと一つになるという者が少ない。

「招きに応えるのは慧き者ではない。嬰兒である。幼児の魂、本当に純情な、生一本な魂が神様とつながる。これぞ御意なり」

と、キリストは言われた。「子」というのはキリストです。子を知る者は父の外にいない。また、父なる神を知る者は子である私と、私が欲するままに顛わした弟子たち、私を受け取った者たちの外にございませんと。このように、神様と問答されて、それから今度は我々に向かつて語られたのが28節、

「凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は輕ければなり」(マタイ11・28～30)

有閑マダムと言ったら失礼ですが、大金持ちでぶらぶら遊んでいる人が

「凡て勞する者・重荷を負う者、我に來れ」

と言つても、蹴飛ばそうかと思ひます。けれども、キリストというお方は本当に枕する処なきお方、

「空の鳥はねぐらあり、ところが、人の子は枕するところなし」

と、言われました。人のために尽くして、尽くして、報いられない生活でありました。そういうお方の招きの言葉なのです。

キリストは病を癒されたり、罪びとの罪を赦された。そのときに赦しつばなしではない。全部、マイナスは自分が背負つておられる。だから、ものすごく重いのです。

ただ言葉で「赦す」と言つて赦されただけだったら、赦す方も楽だし、赦される方もけっこうなお話ですけども、神様の世界はそうはいかなかった。罪に対する審判というものがありました。

たとえば、姦淫の現場で捕えられた女のお話(ヨハネ伝第8章)がありますが、ひどい話です。あれはイエス様を陥れようと思つて、夜明け方に姦淫の現場に踏み込んで、女の人を捕えて現行犯だと言つて、宮におられるキリストの処へ連れて来たのですね。

「実はこの人をこういう次第で捕まえたのですがあなたはどうかしますか」

と。イエスは黙つて地面に屈み込んで字を書いておられた。モーゼは、

「不倫、姦淫というものは重い罪である。もしイスラエルの民の中でそういう罪を

犯す者があれば、その者も相手も石撃ちで殺されるべきである」

と、厳格な審判の律法を与えたのです。それで、キリストの処に連れて来たわけです。キリストは黙つて地面に字を書いておられた。ますます激しく人々は迫つて来た。そのとき



に身を起こして、

「おまえたちの中で石を撃つ資格のある者は石を撃て」

と言って、また屈んで字を書いておられた。そうしますと、いきり立っていた者たちが胸をさされた。「この女の人に石を撃つ資格のある者は撃て」と。みんな心の中で悪いことをしているわけです。キリストは

「色情を懷^{いだ}きて女を見る者は、心の中で姦淫をしたるなり」

と、そこまでおっしゃっている方です。そのお方の前で私は清いと、一人も言えないのです。だから、一人ひとりと去って行き、最後にはその女性だけが残りしました。

「もう、誰もお前を罰する者はいないのか」

「はい、誰もいません」

「私もお前を罰しないよ、これからは罪を犯さないように」

と、そういう場面がヨハネ伝に出てきます。あれはキリストが十字架に懸^かかられる直前のことです。それで、あの場面は本当に感動的なのですが、そのキリストが姦淫の女性を赦しておられる。石撃ちになるところを赦しておられるということは、その分は私が引き受けたよという、お気持ちがあると思う。だから、十字架に懸^かかることが神様の御旨^{みむね}だということがはつきりしたときに、キリストは黙ってそれをお受けになったのです。ソクラテスは毒杯を仰いだといわれますけれども、そういうものではない。

本当に人の負うべき罪、それを自ら背負われた。その裏付けがあつての赦^{ゆる}であり、癒^{いや}しであるのです。

だから、私はこういう言葉を読むと本当にジーンと来るわけです。

「私の軛^{くびき}は易^{やす}く、我が荷は軽い」

と言っておられる。本当は重いのです。キリストは背負いきれない荷を負っていらつしやりながら、しかし、自分は平然と軽々とそれを負って、そして「重荷を負っている人はいらつしやい」と、

「凡て労する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません」

「私は柔和で心が卑^{ひく}い、一番どん底に立っている。高い処から、説教しているのではない。私はどん底にいる。だから、私と一緒に荷物を背負おうじゃないか。そうしたら、きつと楽になるよ」

と、言つて下さっています。

こういう言葉を本当に皆さん、自分のいただいた言葉として、自分のものにしていただきたい。

昨日、宮沢りえさんが貴花田^{たかはなだ}関からもらつたという、何か30万円程のダイヤモンドの指輪ですか、インタビューで「これは軽々しく見せられません」と言いました。それから「億万長者でも与えることのできない物です」と彼女は言いました。ものすごく初々^{ういうい}しく、美し



かったですね。とても素晴らしいと思いました。私はこういうキリストの言葉は、りえさんが喜んだダイヤモンドの指輪以上の値打ものだと思っています。これは確かに無代価です。無代価だけれども、これは主イエス・キリストが私に下さったダイヤの指輪です。この聖言^{みことば}をいただきましたと、抱き締めるのです。そういうものがたくさんあります。私は今日、大事な箇所^{よみがえ}にずっと色を塗っていたのですが、そうしたら全部色刷りです。その一つ一つの言葉は実は生き物なのです。自分が辛いときとか、そういうときに、その言葉がずっと甦^{よみがえ}ってきましたら、もりもりと元気が出て来る。そういうためのものです。本当に味わって下さい。

若い方はこれから、いろいろな御苦労があると思いますが、その人生の中で、11月28日に奥田先生があんなことを言っていたから、一度試してみよう。先生が後、40年生きていると言っていたから、40年やってみて嘘やったらなぐってやると、そう思ってください（笑）。その代わり、本当だったら何か下さい（笑）。そういうものだとは私は思う。

●一日一生

それから次に、主の招きに答える心は何かといえ、**「砕けの心」**です。砕けの心とか、キリストのこういう柔和な言葉に感激して主の処に行きます。主はどういうことを我々に約束しておられるか、ということですが、「一日一生」ということをもって来ました。ルカ伝の12章13節からのところです。さっきの

「明日^{あす}のことを思い煩^{わづら}うな」

という、マタイ伝の言葉を引きましたが、ルカ伝ではそれに前のお話がついていまして、13節から21節というお話があつて、それから「明日のことを思い煩うな」という内容へつながつていく。また、ルカ伝12章がおもしろい。このごろ、遺産相続で揉（も）めているそうですね。私は何も持っていないから、うちの子孫は幸せです。不動産は持っていないでしょ。立派な家をお借りしています、そこに住んでいますから。借家の権利は相続できますが、税金はいらない。ありがたいことです。私は法律の先生ですから、無料法律相談というのをやっています。やはり、相続の相談が多い。生きている間から、後どうやって揉めないようにしたら良いかと言って、ご相談がいろいろあります。そのとき、私はキリストよりも親切だと思っている。キリストは断っておられるのですから。

「私はおまえたちの裁判官でもないし、遺産分配人でもない」

と、断っておられる。

「わが兄弟に命じて、嗣業^{しぎよう}を我に分たしめ給え」

と。長男が相続したのでしょう。次男、三男が少しは私にも分けて下さい、なんとか執^とり成^なして下さいと、頼みに行つたのでしょう。そこで、私には関わりがないことだ、奥田教授の処へ行って来なさいというわけです（笑）。その次に言われたのは、



「^{つつし}慎みて凡^{すべ}ての^{むさぼり}慳^いをふせげ、人^{いのち}の生命^{もちもの}は所有^{もつもの}の豊^{ゆたか}かなるには因^よらぬなり」(ルカ12・15)

これはもう、素晴らしい言葉です。20年ぐらい前、お名前を出したら失礼かもしれませんが、石川達三という方が朝日新聞に小説の連載もしておられましたが、その方がどこかに書いておられた。「自分は一応作家で収入もある、3千万円か4千万円貯金がある。けれども私は安心できない。なぜなら、政治が悪い。今持っている3千万、4千万は自分がもう少し年をとったときにどうなっているか分からない」と。はあと思ったんですね。あんなお方でさえこんなことをおっしゃいます。

「人の生命は所有の豊かなるには因らぬなり」

です。何も持たないでいい、私の方がずっと自由人です。石川先生はそれだけの資産と能力を持っていながら、そんな思い煩いから解放されないということを書いておられた。そしてキリストは^{たと}譬えをおっしゃいました。

「ある富める人、その畑、豊かに実りたれば、心の中に^{はか}議りて言う、『われ如何にせん、我が作物を蔵^{おさ}めおく処なし』遂^{つい}に言う『われかく為さん、わが倉を毀^{こぼ}ち、更に大いなるものを建てて、其処にわが穀物および善き物をことごとく蔵めん。かくてわが^{たましひ}靈魂に言わん、靈魂よ、多年を過^すごすに足る多くの善き物を貯^{たくわ}えたれば、安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ』」(ルカ12・16～19)

豊年万作で蔵^{くら}を壊して新しい蔵を建て、そこにいっぱい財宝を詰め込んでこれで一生分の財だ。さあ、これからは私の好きなような生活をするのだと。皆さん、そんなふうに樂しみにしている方多いのではないでしょうか。けれども、神様はどうおっしゃったか。

「^{おろか}愚なる者よ、今宵^{こよひ}なんじの^{たましひ}靈魂とらるべし、さらば汝の備^たえたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言い給えり。己のために財^{たから}を貯え、神に対して富まぬ者はかくのごとし」(ルカ12・20～21)

今日お迎えが来るよ、そうしたら、誰のために財産を貯えたのだ。だから、自分のために財を貯えて、神様に対して財を貯えない人は、こういうものだ。そして次のように弟子たちに言いました。

「この故にわれ汝らに告ぐ、何を食^いわんと生命^{いのち}のことを思い煩い、何を著^きんと^{からだ}体のことを思い煩うな。生命は糧^{かて}にまさり、体は衣^{まさ}に勝るなり」(ルカ12・22～23)

一般的に申しまして、私たちは体のことをものすごく気にします。また、着物のことも気にします。健康相談、健康スペシャル、いろいろなことがあります。私もスポーツをするのは健康を考えてやっています。

しかし、この着物、食物、これはみな手段なのです。生命^{いのち}、体が本体なのです。その生命、体を養い給う者は誰かといえ、神様です。天のお父様があなた方に衣を与え、食物を与え、



必要な物をすべて与えて下さる。だから、

「神様との関係をまつすぐにしなさい。まつすぐになったら必要なものは全部備わって来ますよ」

と。ところが人間は「俺がやらねばならない、私がしなければならぬ」と言う。たしかに自分でやること、これは大事です。人は自分で自立することは大事ですが、そのときに神様に信頼をして働くのか、「神様なんかいないから、私が貯蔵しないとだめだ」と言つて働くのか、で全然違うのです。自分で働いて得たものは、今度は惜しくて人にやれないし、また、盗まれはしないかと心配になるし、大変です。神様が下さったものならば、これは自分のものではないですから、もし、必要だったら人様にあげるし、自分に必要なものはそこに残るでしょうし、すべて神様と自分という幹が太ければ、もう、心配はいらない。そのことをここでおつしやつている。

「鴉を思い見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。しかるに神はこれを養いたもう、汝ら鳥に優ること幾許ぞや。汝らの中たれか思い煩いて、身の長一尺「30センチ」を加え得んや。されば最小き事すら能わぬに、何ぞ他のことを思い煩うか。百合を思い見よ、紡がず、織らざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及ざりき」(ルカ12・24～27)

ソロモンは本当に大変な栄華を極めました。それもなぜかと言いますと、ソロモンは王様になったとき、神様に何が欲しいかと聞かれ、

「金銀財宝は要りません、知恵を下さい」

と言いました。王様というのは正しい裁きをしなければならぬ。国を正しく治めなければならぬ。それは私利私欲があればだめだから、

「神様、あなたの知恵を下さい」

と言いました。それでもものすごく神様は喜ばれて、ソロモンにいろいろな富が集まり、栄華を極めたということになった。ところが、そんなソロモンだつてこの野の花には敵わないよ、と言われました。

「今日ありて、明白炉に投げ入れられるはかない野の草をも、神様はこのようにすばらしく装つていらつしやるではないか。ましてあなた方は、神様にものすごく愛されている。目の中に入れても痛くないほど、愛していただいているお前たちだ」と。

「ああ信仰うすき者よ、なんじら何を食い何を飲まんと求むな、また心を動かすな。これみな世の異邦人「神様を知らない民」の切に求むる所なれど、汝らの父は、此等の物のなんじらに必要なを知り給えばなり」(ルカ12・28～30)

となると、後は神様を求めることが第一、神様の御国を求めることが第一。第一のことを



第一にしたら、あとは自分を養い育てるものはちゃんと与えられ、ひとりでに集まってくる。

「おそ懼るな、おそ小さき群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり」（ル

カ12・32）

ここに「小さき群よ」とあります。これもありがたいお言葉ですね。宗教といいますが、なんだかでつかいお寺なり会堂を建てて、お宮を建てて、けばけばしくして、お金を集めて、人を集めて、いかにも「うちの宗教ははやっています」というのが多い。裾野キリスト召団はまことに小さき群れです。京都だって小さき群れです。でも、イエス様の時ですら、小さき群だったのです。本物を求めて生命を慕う人の群れはいつも小さい。小さいけれども小さいところから、泉が溢れてやがては大きな川となって流れて行くのです。父の御意を妨げるものは、何一つありません。

私は親鸞の『歎異抄』が大好きです。「弥陀の本願」と親鸞は言いました。

「念仏を唱えようかという殊勝な心が起きること自体が弥陀の本願の御業である」

と、親鸞は言った。

『念仏まうさん』とおもいたつこころの発るとき、すなわち摂取不捨の利益にあ

ずけしめたもうなり」（歎異抄第一章）

と。弥陀は老若男女あるいは善悪を問題になさらない。とにかく、救わずんばやまずという、その本願の効力という、引き返す力、これは人の悪なんか問題にしない。善人はとかく自分の善をよりどころにして、あまり仏様にすぎらない。悪人はもう、救って下さいという一念がある。だから、

「悪人の方が救われる正因である」

と、親鸞は言っています。お弟子さんの誰かが、

「もしも、法然の教えが間違っていたら、先生、どうなさるおつもりですか」

と尋ねると、

「念仏だけ唱えろ。念仏に勝る善はない。どんな善行も念仏にはかなわない」

とおっしゃる。「念仏」というのは、ただただ弥陀の本願にすぎるだけ、

「南無阿弥陀仏」

です。これは小池先生に教えていただいたのですが、「南無」とは、帰依、祈入ということ。「阿弥陀」は無量寿、無量光。そして、「仏」というのは、悟りを開いた人、覚者、つまり、お釈迦さんのことでしょうか。無量寿無量光の覚者であるお方の中に祈り入ることだと。我々だったら、無限無量の永遠の生命であり、無限無量の光であり給うキリストです。だから、

「南無キリスト」

と小池先生は言われました。だから私は、

「南無主さまー！」



とよく祈るのです。それで親鸞はこの

「南無阿弥陀仏しかない」

と言った。

「法然の教えがもし、うそだったらどうするのですか」

と、弟子が聞いた。親鸞は、

「私は所詮、地獄必定の身である。私はどんなにもがいたって極楽に行けるよう

な立派な人間ではない。私にとつてはもう地獄必定の身。だから騙されたつてか

まわらない。地獄に落ちて当たり前。もし南無阿弥陀仏と言つて救つていただけたら、

こんなありがたいことはないではないか」

と、言いました。他に救われる可能性をもっている人なら、騙されたという思いが起こるだろうが、しかし、私にはこれしかないのだ。だからこれでいいのだと。親鸞の『歎異抄』はすばらしいですね。

それからこんなことも言いました。弟子の一人が、

「親鸞先生、私この頃、ちつともありがたいのですが、喜ばなければいけない

と思うのだけれど、何か喜べないし、こんなことで救われるのでしょうか」

と言いました。そうしたら

「だからこそ、弥陀の本願なのだ。だからこそ、お前のような奴を救おうという弥陀の本願があるのだ。いよいよ弥陀の本願は本物である」

とおっしゃいました。だから、

「何が来ても弥陀の本願だよ、本願、本願」

と言う。キリストのみことばというのはそういうものです。

「懼るな、小き群よ、汝らに御国を賜うことは、汝らの父の本願なり」

と。だから、こつちがどう思うかではない。キリスト様の方が、

「こうするぞ」

と言つて下されば、

「はい、それが成ることをありがたいとお受けします」

と。それだけの事です。そういうふうには、

「もう大丈夫だ」

と言われたら、地上に財宝を貯える必要がなくなつてしまふ。だから、キリストは、

「汝らの所有を売って施済をなせ。己がために旧びぬ財布をつくり、尽きぬ

財宝を天に貯えよ。かしこは盗人も近づかず、虫も壊らぬなり、汝らの財宝

のある所には、汝らの心もあるべし」(ルカ12・33〜34)

と。これは普通のことをおっしゃっているのです。これを戒めだとか、「キリスト教徒になったら財産を全部施さなければいけない、これは大変だ」とか、そう思つたら、苦しいです。



本当に神様は自分に必要な物は全部備えて下さる。地上に財宝を持っていたら、倉もいるし、番人もつけておかねければならないし、盗まれたら、警察に届けに行かねければならないし、これは大変だと。いろいろ煩^{わづら}わしい。何も無ければ、必要な物さえあれば、それで良いのだと。必要以上の物は人様にお役に立ててもらったら、こんなありがたいことはない。自然にそうなるのです。私の能力も、もし所有があれば所有も全部、上から賜った物で、自分が稼いだものではない、神様が下さった物だと受けとります。そうすると、ストレスがなくなる。世の中の人間関係も非常にスムーズになります。

「人は二人の主^かに兼ね事^{つか}うること能^よわず。……まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり」(マタイ6・24〜33)

「凡て労する者・重荷を負う者」というお言葉と、

「この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり」

と、これが響き合っているのです。ありがたいです。私は11月中に書かなければならない法律の雑誌論文がありますが、「明日のことを思い煩うな」と書いてありますから、大丈夫だと思っています。そんな生活をしている。もう煩われない。

●砕けの魂、幼児の心

キリストの喜び給う魂はどんな魂かということここに「砕けの魂、幼児^{おさなご}の心」と書きました。砕けの魂という処から、三つほど、かわるものを選んでみました。

ルカ伝第18章、これはキリストの譬^{たとえ}話^{はなし}でして、「パリサイ人^{びと}」というのは、自分は正しいと信じて、自分が正しいと信じているだけではなくて、他の人を審^{さば}いてしまう。「俺は正しい、然^{しか}るにあいつは」とか、「俺はこんなに努力してきた、然るにあいつは怠^{おろそ}け者だ」とか、そのように、自分が一生懸命やればやるほど、そうでない人に対して無性に腹が立つ。人間はそんなものなのです。勉強もしないであいつは1番や、けしからん。俺は勉強したのに何で10番にもなれないんや」ということもあるかも知れません。それでこのパリサイ人というのは自分で一生懸命に律法を守っている。そして神様の前に胸を張って祈ったわけです。祈りをするために二人の人がお宮に出掛けました。一人はパリサイ人、一人は取税人でありました。

「パリサイ人^{びと}、たちて心の中にかく祈る『神様、私はほかの人のように、強奪^{きやうだつ}をしたり、不義を行ったり、姦淫^{かんいん}をしたり、そんなことは一切しておりません。



又この取税人みたいにひどいこともしておりません。私は一週間に二度断食をし、また収入の十分の一は律法おきての通り献げています。こんな立派な私にして下さった神様、ありがとうございます』と、非常に胸を張ってお祈りをした。ところが取税人ははるか彼方に立ちて、目を天に向けることもできない。胸を打ちながら、『神様、罪びとである私をどうぞ、憫あわれんで下さい』、それしか言えなかった。ところがキリストはこうおっしゃいました。『私はあなた方に言うよ。取税人「罪びと」の方が、かのパリサイ人「義人」よりも神様に受け入れられて、家に帰って行つたのだよ』と。『おおよそ己を高うする者は卑ひくうせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』（ルカ18・11～14）

と。だいたい、男は自分を誇りたがるものです。誇りがなければ自分の存在根拠がないと信じていますから。何か、人よりも優れた点がなければ自分の存在理由がないと思つてしまふ。ところが神様の前ではどうかと言いますと、誇り高き奴、自分を偉い奴だと言っている者は、神様はお嫌いなのです。

「自分は本当にしようがない奴です、何とかして下さい」

と言つて胸を打っている人を、神様は喜んでお受け下さるというのですから、実にありがたい。

次に、今度は人々がキリストの処に赤ちゃんを連れて来た。そういうわけか、弟子たちは

「こんな処は子供の来る処ではない。帰れ、帰れ」

と言つて追い払つた。ところがキリストはこれを大変怒られました。

「イエス幼児おさなごらと呼ばひよせて言いたもう『幼児らの我きたに來るを許して止むな、

神の国はかくのごとき者の国なり。われ誠に汝らに告ぐ、おおよそ幼児のご

とくに神の国をうくる者ならずば、之に入るに能あたはず』（ルカ18・16～17）

幼児おさなごは純情で一直線でしょ。大人が約束をしたら、必ず果たしてくれると信じ切っている。それをお父さんが会社の都合で行けなくなつたとか何とかで、約束を破っていると、だんだん大人を信用しなくなります。幼児というのは本当に100%に信じます。それから行動的です。「今度の日曜日にごそこへ行こうね」と言つたら、毎日毎日、後何日で日曜日と待っています。体で現します。お父さんが帰つて来ると、玄関まで飛んで行き飛び付くという、とても行動的です。ですから、ここにも

「幼児の如くに神の国を受け入れる者でないと神の国に入ることができない」

という。神の国を研究するとか、神の国を信ずるとか、そんなことは言っておられない。

神の国を体の中に受けとる。そうしたら、神の国の中に入つて行くという、非常に行動的に、現実的に生活の中にそれを実行していく、それが大事です。

次にザアカイさんのお話がルカ伝第19章に出て来ます。このザアカイという人は取税人



の長で富める人です。だいぶん悪いことをしたのでしょうか。こういう人は本当は神の国から遠い。しかも背が低い。人々からある意味ではちよつと軽蔑されていたかも知れません。ところが、イエスという方の行列が通つて行くというので興味津々で見ようとしたが、背が低いから見えない。そこで「いちじく桑」という太い桑の樹があるのですが、それによじ登りまして、その上から行列を見下ろそうとしました。

「前に走りゆき、桑の樹にのぼる。イエスその路を過ぎんとし給う故なり。イエス此処に至りしとき、仰ぎ見て言いたもう『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』」(ルカ19・4～5)

イエス様はザアカイの心がよく見えている。「お前、無礼者よ」とはおつしやらなかった。「そんなに私を迎えてくれているのか。よし、今日はお前の家に泊まるから、早く降りていらつしやい」と、おつしやった。

「ザアカイ急ぎ降り、喜びてイエスを迎う。人々みな之を見て呟きて言う、『これは罪びとの家に入りて客となれり』」(ルカ19・6～7)

人々は、

「イエスはなんであんな奴の処へ泊まるというのか。ザアカイのことを知つてか、知らずか知らないけれども」

と呟いていました。ところが、

「ザアカイ立ちて主に言う、『主、視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん、もし、われ誣い訴えて人より取りたる所あらば、四倍にして償わん』」(ルカ19・8)

「今まで少々ひどいこともしました。全部、四倍にして償います。私の財産の半分を人々に捧げます」

と言って、ザアカイは自ら進んで自分を変え、生活を変えました。これは「喜びて」とあります。渋々、嫌々ではないのです。だから、イエスも喜ばれました。

「イエス言い給う『今日、救はこの家に来れり、此の人もアブラハムの子なればなり。それ人の子の来れるは、失せたる者を尋ねて救わん為なり』」(ルカ19・9～10)

アブラハムは信仰の父と言われます。ザアカイは、今まで失われたる子、放蕩息子ではありませんが、このように強欲で人々から嫌われて、お金持ちでこの世のことばかり考えて、神の国から遠かった。けれども、イエスがお通りになるこの瞬間にザアカイは変貌したわけです。

「ザアカイよ、降りて来いよ、今日お前の処に泊まるからね」

と、弾んだ声でおつしやったのでしよう。ザアカイは本当に幼児の如く、飛び降りまして、



喜んで自分の生活を変えました。「たった半分ですか、全部施したらどうですか」と、そういうことをおっしゃらないで下さい。半分だって、三分の一だって、なんだって良い。心が大事なのです。

「私は半分献げましょう。それから今までひどいことをした人にみんな償い
ましょう」

と。償つたらザアカイはゼロになるかもしれませんが。こういう心が大事なのです。

次の三つ目の「碎けの魂」は百卒長。百卒長というのはローマの兵隊さんで、百人組の隊長さんだから、昔で言いますと小隊長です。こういうローマの小隊長がイエス様に出会った場面です。

「イエス、カペナウムに入り給いしとき、百卒長きたり、請いていう『主よ、わが僕、中風を病み、家に臥して甚く苦しめり』（マタイ8・5〜6）
百卒長は自分のことをお願いしていない。部下のことなのです。

「部下が中風でひどく苦しみ家で寝ています。イエス様、どうぞ、お願いしま
す」

と。どうして欲しいとは何も言っていない。ローマの兵隊さんたちは占領軍です。それでイスラエルの人たちは被支配階級です。被占領地の人たち、その中のイエスという方は名も無きお方です。けれども、百卒長はイエス様をただならぬ者と見ていたわけです。この方は普通のお方ではない、この方はすごいと信じていた。だから、こうやってわざわざイエスの処へ来て、

「私の部下が苦しんでいますので、お助け下さい」

と言った。それでイエス様は気楽に、

「では、行こう」

と言われた。百卒長は驚いて言いました。

「主よ、我は汝をわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり」（マタイ8・7〜
8）

「とんでもありません。あなたのようなお方を私のあばら家にお迎えするなんてとてもできません。恐れ多いです」

と。私流に言いますと、私は日曜日に集会をしています、一週間忙しく何の準備もできなくて、朝の集会の時間になります。この百卒長の気持ちなのです。

「イエス様、あなたにここに來て下さいとは、とても言える柄ではありません。けれども來て下さい」

と、そう祈るわけです。普通の生活をしていましたら、一週間があつという間に過ぎます。本当に聖書の勉強をする時間もなければ、何もできない。けれども、集会をしますと、一応、牧師さんの役目もしなければいけません。これは一つの戦いです。けれども私は開き直つ



ています。何も自分で好き好んでやっているのではない。キリストがやれとおっしゃって下さったからやっている。キリストが主であって、私はこの集会の番頭さんだ。キリストをここにお迎えして、皆さんに御馳走をだしてもらおうと。

「私は御馳走の準備をするだけです。主よ、どうぞ、お願いします」

と。しかし、心の中ではやはり、来ていただくのは勿体なきすぎて、こんな準備もできない人間が、日曜日に来て下さいというのは、どうも言いかねます。それで私は百卒長が好きなのです。この

「我は汝をわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり」

をそういうふうに解釈をしているわけです。どんな、自分の生活の中にみことばを引き込んで解釈すればよい。私はそういうふうに出て受けてついています。

「主よ、私はあなた様を我が屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり」

と。それで彼は何と言ったか。

『ただ御言を下さい。あなたが、百卒長の部下よ、癒えよ』と一言、言つて下されば、直ちに癒えるはずです。

そういう素晴らしい信頼を寄せていました。なぜ、そんなことを言ったかといえ、

私は軍隊の中にいます。

ローマの皇帝が一番上で、命令はずっと下まで通りますから、百人組の隊長ということはローマの権威をいただいて百人組の隊長ということですから、私の命に背くということはローマ皇帝に背くということです。私の命に従うということは、私という人間に従うのではなくて、ローマ皇帝の権威に従うことです。そういうつもりで部下は動きます。

だから、部下に来说いと言え来ます、行けと言え行きます』(マタイ8・8)

9)

「それは私個人ではない、私のポストにきているローマの権威に従って部下は動いています。イエス様、あなたは神様の権威を持っていらつしやいます。あなたの中には神様の権威が宿つていらつしやいます。だから、病に対して癒えよと、一言おっしゃれば、必ず癒えるはずですよ。そういう気持ちを含めて言ったのです。

「イエス聞きて怪しみ、従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、かかる篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし』」(マタイ8・10)

キリストも心のフランクな方です。祖国を苦しめている憎いローマとはおっしゃらなかった。ローマはローマ、しかし、百卒長には何の罪も無い。この百卒長の部下思いの、そして「屋根の下にお迎えできるような者ではありません。お言葉だけを下さい」というひたむきさ、この生一本な百卒長の姿にイエスは大変感動されたわけです。

「イスラエルの中にこんなのはおらない、イスラエルの負けだ」



と、おっしゃいました。そして百卒長に仰った。

『汝の信ずることく汝になれ』と言い給えば、このとき僕いえたり」（マタイ 8・13）

キリストの世界というのは、こういう世界です。キリストの中に宿っていた神の世界と
いうのはこういう次元が宿っていたのです。こんなことが今もありありと成就したら、そ
れは素晴らしいと思うのですが、そうはなかなかいかない。これは徴（しるし）でしたから。しかし、
キリストは

「必ず神の国は成る。これからいつか成就する神の国とはこんなものだよ」

と示して下さっているお手本なのです。今流の言葉でいえば、商品見本です。つまり、

「これが見本ですから、これと同じもの、これ以上のことが向こうではあります」

と言って、先に示して下さいている。神様はキリストを遣（つか）わして、

「神の国というのはこういうものだよ、お前は神の国を引（き）提（さ）げて人々に伝えろ」

と言ってキリストを送り出されたのですから、そういう自覚をキリストは持つておられた。
だから、本当にこういうところを読みますと、私も本当に感動するのです。

「すごい、イエス様、あなたはすごい。私もあなたの弟子のはしくれです。この百
分の一でもいいからして下さい」

と、すっかり弟子気分です。回りの弟子に言うておられるのに、もう、私が一番弟子みた
いなつもりで、キリストの言葉を聞くわけです。だから、福音書をお読みになるとき、ド
ラマとしてそこに自分が居合わせて、あわよくば捕まえるよと。

そうではないですか、さっきの貴花田、宮沢りえちゃんが来たら、みんな押し寄せてうわつ
と何とか触ろうとやるでしょ。相撲の花道を下がる時も背中をぽんぽんとたたいたりし
て。あれは一体感がある。ああしてなにか、一緒にありたいと言う気持ちが背中をさすつ
たりするのです。

我々は主さまと、そのように一体感を持つ。二千年の隔たりや距離的隔たりは問題では
ない。キリストは祈れば、ずっと来て下さるお方です。太陽を見て下さい。太陽の遠さは
何百万kmなのですか。ものすごい処から太陽の光が届きます。私はドイツでも生活をしま
した。あの太陽は日本もドイツも照らす。本当に一つの太陽がドイツにおればドイツの私
を照らしてくれるし、日本にいれば日本の私を照らしてくれます。しかも、ただ空に浮い
ているのではなくて、光が届いて暖まります。熱が来ます。

キリストは霊界の太陽です。

「主イエス・キリストさまー！」

と真剣にお祈りになって下さい。

「南無主さまー！」

と、そうすればすつと来る。そして、胸の中に太陽の火（とも）が灯る。そういうことをきつと実



感なさると思います。

ですから、聖書というものは、「書かれた文字だ、昔のユダヤの時代の物だ」と学問的研究対象にしている人は、いくら研究してもだめです。けれども、私みたいにこうやって、自分の食物として食べている人間は、それによってどんどん自分自身が本当に変わって来ます。みずみずしく若々しく、力強く生きていきます。だから私は「これは宝です」と言いたい。私は40年後にもっともつと言いたいと思いますね。そういうふうな希望を与えてくれます。私は自分の生活が一つの実験台と思っています。自然科学は実験でデータを作って証明するでしょ。この答えは自分が実験台にならないとしようがない。けれども、きつと素晴らしい成功を修める実験をこれからやり続けるだろうと私は思っています。そういう実験を重ねた方がたくさん出てきましたら、これだけたくさんの方が自分の生涯をかけて実験して、やってみて、みんな輝いていると、

「やはり、キリストというのはすごいなあ、キリストを送られた神様はいらっしゃるのだなあ」

と、見えない神様を現すのはそれしかない。私たちが自分の生活で本当に、

「主イエス・キリストは素晴らしいお方でした。愛のお方でした。生命あふれるお方でした。そのことを生涯でこれだけは証言できます」

とっておさらばしたら、素晴らしい人生ですね。そういう人たちがアブラハムの子だと思うのです。キリストの弟子だと思う。

●恵福なるかな、霊の貧者

そういう「碎けの魂」は祝福に預かります。イエス御自身が実に神様の前に霊の貧しいお方でした。「霊の貧しい」というのは、「自分は何も持っていない」ということです。自分は神様の前に空っぽ、自分を何者ともしていないという、投げ出しの、開けっ広げの姿、それが貧しいという姿でして、さもないという姿ではありません。貧しいというのは、己のものを何も持たないという姿です。

『「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。」』

神様が慰め給う、「私が慰めるよ」と。

幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣が^つん。幸福なるかな、義に飢え^{さいわい}渴く者。その人は飽くことを得ん。幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。』（マタイ5・3〜7）

その人が苦しんでいるのを見て憐憫の心、同情の心を寄せる。具体的に何もできなくても、手を握って本当に慰め祈る、それで良い。病める方をお見舞いするときも、自分はその人に代わってあげることはできない。しかし、病床へ行って手を握って黙って瞑目してお祈



りする。そうすれば、何か伝わる。

「その人は憐憫を受けん」

と、みな神様から受ける。

「幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん」（マタイ5・8）

この「心の清き」というのは、聖人という意味ではない。幼児の心というか、純一というか、ひたむきということ。ごちゃごちゃといろいろなものがないことです。

「主さまー」

と言って、子供のように単一です。「単一」とは、いつも主さまばかりで他の事は何もしていないということではない。子供は遊ぶときは遊びに熱中します。ご飯を食べるときはご飯に熱中します。泣くときは泣くことに熱中します。そのとき、全身全霊でそれに向かつて行く。しかも、子供は邪心がありません。これが「心の清き」姿です。分裂せず、対象にのめり込んでいる姿。ですから、「心の清き者」は複雑怪奇でない人間、夏目漱石の「坊ちゃん」のような人、それでよいのではないのでしょうか。ザアカイや百卒長みたいな人に神様がお宿りになる。神様がお宿りになるから、神が映ってきます。

「幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と称えられん」（マタイ5・9）

以下、いろいろありますが、省略します。

●永遠の生命

ヨハネ伝3章16節というのは、今までのいろいろな時代のいろいろな方が聖書の中のこの一句と選んだ、そういう言葉です。

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる

体の中にいただく、

者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり」（ヨハネ3・16）

「神は独子を賜ったほどにこの世を愛して下さった。それは信じる者が一人も

亡びないで、永遠の生命を得るためである」

と、口語訳ではなっています。

「初めに愛ありき」

なのです。「初めに信仰ありき」ではない。

「初めに神の愛ありき。初めに神の救いの御業ありき」

です。それに我々は打たれた。打たれて、

「はい、参りました。ありがとうございます」

と。そこから、関係が始まる。私は先に「招き」ということを言いました。神様の方で、「お前のために救いは用意したよ。お前を愛して、お前のために素晴らしい世界を



備えたよ。だから、帰っていらつしやい」

と、招いていらつしやいます。キリスト御自身が神様からの私たちへのプレゼントです。もし、キリストがいらつしやらなかつたら、大変でしたね。旧約聖書の神様だけでしたら、私はおつかなくて近づけない。やはり、イエス・キリストというお方がいて下さるから、安心して甘えていられると思います。安心してキリストにしがみついていける。やはり、おごそ厳かなる聖なる神があり、この聖なる神の前に立てない人間の醜さ、みにくその両方をちゃんと取り持っているのがキリストという仲人、なこうど中保者です。だから神様の御意も、みこころ我々の立場も分かつて背負つて下さった。だからキリストはありがたい。

私はさつき親鸞を非常に讃えました。弥陀の本願はすばらしいが、なぜキリストかといえば、キリストは具体的に私の罪も病も全部引き受けて下さったからです。具体性がある。弥陀の本願というのは、親鸞は本願を図太く受けとりましたけれども、別のところで言っている。方便ほうべんかも知れないと。

「別に見たわけではない、出会ったわけではない。しかし、それしかない」という言い方で言ってます。だからこそ、

「弥陀の本願の具体がキリストである」

と、むしろ私はそう言いたいくらいです。

「無量寿、無量光の覚者キリスト。永遠の生命、永遠の光、その覚者たるキリスト」と。だから私はお釈迦さんもイエス様も天国では、本当にニコニコして

「一緒にやろうね」

と、きつと言っておられると思う。排斥し合う世界では絶対ない。だからもし、親鸞上人がイエス・キリストに出会われたら、

「ああ、これぞ弥陀の権化」

とおっしゃったかも知れない。人の魂のことはとやかく言えませんが、一人ひとりがそういう絶対なるお方と向かい合つて出会ってほしい。私は恵福さいわいにしてこのイエス・キリストというお方に青春の頃に出会わしていただいたので、本当に良かったと思う。

「神その子を世に遣わしたまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。彼を信する者は審かれず、信せぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり」(ヨハネ3・17、18)

プレゼントが来ているのに、それを要らないと蹴飛ばしたら、もう行くところがありません。我々は親鸞と同じ「地獄必定の身」なのです。

地獄必定の身である我々に、このプレゼント、キリストを下さった。キリストは、

「お前の罪も何もかも全部、染み抜きした。お前はもう清いのだ」

と、十字架で引つ被つて下さった。だから安心してキリストの中に飛び込みなさいと。

キリストは神様の前にいつも十字架で、



「彼を責めないで下さい、私が全部罪を背負っていますから。彼と私は一つです」と。子供の罪を親が引つ被るように、キリストは私の罪を全部引つ被って、審きを受けて下さっている。皆さん、

「愛する人のためなら生命を捨ててもよい」

と思われたことはありませんか。本当に愛する人のためなら、生命を捨ててもよいと、男女の恋愛もそのぐらいのところにいつたらよい。本当です。そうしたら、離婚しない。自分可愛いさの恋愛だから、自己愛だから潰れる。けれども、本当にこの人のためなら、自分の生命も惜しくない、向こうもこの人のためなら、惜しくないとお互いがそう思ったら、そしてそこに祈りがあれば、少々の事があっても乗り越えていけると思う。私は結婚式で言う。

「結婚生活というのは生易しいものではない。恋愛の間は良いところばかり見ているし、時たま会うから、いいけれど、一緒に暮らしてごらん。いろいろなことがある。醜いところもわがままなところも全部出てくる。それでいながら、ただただ愛して欲しいなんて思ったらだめだし、愛そうと思っても愛せないこともあるだろう。だからそこに祈りが必要なのだ。弱い人間がお互いに神様の前に祈るという、祈り心があつて初めて、成り立っていく」

と言う。みんなシーンとして、ちよつと湿っぽいかなあと思うのですが、幸せて浮き浮きしているときに、本当のことを言っておくのです。

それで、神様の審判は何かと言いますと、人が光へ来ない、これが審判です。自分で自分を審判している。

光が来たのに光から逃げて穴蔵へ逃げ込んで行く。こればかりは救いたくてもどうしようもありません。

「光の処へいらつしやい」

とおつしやっています。

●愛

「愛する者よ、われら互いに相愛すべし。愛は神より出づ。おおよそ愛ある者

は神より生まれ、神を知るなり」（ヨハネ前4・7）

神学者だったら、「アガペーの愛」ということを言いまして、「神の愛はキリストを信じる人にしか流れて来ない。だからキリストを知らない人は愛を持つことがない」と、そういう理屈をおつしやる。けれども、ここはそんな条件を付けていない。

「おおよそ愛ある者は神より生まれ、神を知るなり」

と、大胆です。私は人間というものを百%の罪びとだとか、逆に百%の義人、聖人だとかいう風に割り切るのは、どっちも間違いだと思う。人間は光と影が交互に入り交じってい



ます。

「さんせんそうもく山川草木ことごとくぶつしやう仏性あり」

というように、人間は神様に造られた存在ですから、人間の中に光が宿る。しかしながら、影である闇の力が強くて、子供の頃はニコニコとした天使だったのが、いつしか見る影もない姿になっていく。それがキリストによってまた幼児に、しかも幼児よりもっと素晴らしい姿に変えられる。いつまでも幼児では困りますから。一ぺん自我を通り越して、いろいろな戦いを戦って、その後にもっと素晴らしい姿に変えられていく。これが神様の御意だと思ふ。どっちにしましても、愛というものは人の中に宿っています。しかし、その愛がどうしても自己愛とか、エゴイズムに負けちゃって、本当の純なる姿に現れてこない、それが人間の現実です。しかし、純なる姿に現れてきている人は神の子です。たとえば、お母さんがわが子を救うために犠牲になって死ぬ。親鳥が雛を守るようにして死ぬ。そういう姿は本当に神の愛ですね。

「愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり」（ヨハネ前4：8）

ユダヤの宗教は犠牲の宗教です。遊牧の民族ですから、我々だったら、稲穂を捧げるところを、彼らは動物を捧げました。キリストはその動物の犠牲の羔羊となつて下さった。だから、ここに「宥の供物」といった言い方をしている。

「愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し」

と。これも皆さん安心していただきたいのですが、

「私は神を愛せない」

「あたりまえだよ、神なんか、愛せる人がいるものか」

と。旧約の律法は

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして汝の神を愛すべし」

全身全霊でひたむきに神を愛せよと。それから、

「己の如く、隣人を愛すべし」

と、この二つが旧約聖書の最も大事な戒めだとあります。その通りですが、そんな全身全霊で神を愛するなんて、生身の人間ができるものですか。そんなもの生身の人間が愛せないでしょう。けれども、ここに書いてありますように、

「愛というは、我々が神を愛したのではない。神様が私たちを愛して下さった。

そして、独子キリストを下さった。これによって死んでいた私が生き返った。

そして、感激の生涯、感動の生涯、ご恩返し of 生涯を送る。そのときにいつ



「しか自分は神様を愛している」

と。キリストを愛しているということが分かります。キリストを愛することが神様を愛することです。

見えない神様を愛することは無理です。神様のお使いとして来て下さったイエス・キリストというお方を愛することが、大事にすること、神様を大事にすることです。だから、我々はどこまでもイエス・キリストを中心にして生活をいたします。「キリスト教」といいますね、キリストなのです。「エホバ教」ではない。キリストなのです。

「愛する者よ、斯くのごとく、神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし」（ヨハネ前4・11）

ものすごく愛されている人でなければ、人を愛せない。御家庭でもそうですよ。豊かな愛の家庭に育った人は、非常に伸び伸びとした性格であるということと、それに人を信じますね。いじめられていないから、人を信じます。そして、人に対して寛大です。それがもう、家庭が壊れ、いじめられ、非常に両親が仲たがいでいる家庭の子どもさんは、どうしても閉じこもっているとか、こつちが愛してもなかなかその愛を受け入れてくれない。そういうことがあります。ですから、御家庭というものは子供さんたちのためにも大事にしたいとお願いしたいと願わずにいられない。私はイエス様という方はものすごく神様から愛された方だと思う。だから、あのように愛を流されたと思う。インドでいろいろな奉仕の業をなさっているマザー・テレサもそうでしょうね。

●主は我が牧者

次に「主は我が牧者」という詩篇の歌ですが、これは神様と共に、キリストと共に歩く者の歌、旧約聖書の中ですから「エホバ」と書いてありますので、ここでは「主」と読み直します。

「主はわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。

主は我を緑の野に臥させ、いこいの水濱にともない給う。

主はわが靈魂をいかし、聖名の故をもて我を義しき路にみちびき給う。

たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ、

なんじ我とともに在せいまばなり、

なんじの咎なんじの杖われを慰む。汝わが仇のまえにわがために筵を設け、

わが首にあぶらを注ぎ給う、わが酒杯は溢るるなり。

わが世にあらん限りは必ず恩恵と憐憫と我にそい来たらん、

我はとこしえに主の宮に住まん」（詩篇23篇）

原語では、

「恩恵と憐憫が私を追いかけて来て捕まえて離さない」



という言葉だそうです。

●天国の姿

このようにして神様の恩恵に浴して参りますと、段々、自分が天国人の姿にいつしか変えられていく。天国人の姿に変えられていきますと、天国の姿はこんなものだと分かります。それがマタイ伝5章、ルカ伝6章です。これはさつき言いましたように、神様に愛され、赦しをいただき、ものすごく自分は大事にされている、自分は既に永遠の生命をいただいているという、豊かな心にされた人間が言えることでもあります。これはキリストの御心です。キリストはこのようなお方でした。同時に私たちもそのような人にして下さるのです。

『なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし』と「旧約聖書に」いえることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その日を悪しき者のうえにも善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。なんじら己を愛する者を愛すとも何の報を可得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝る事がある、異邦人も然するにあらずや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」（マタイ5・43～48）

無差別無条件の愛であり、「目には目を、歯には歯を」ではありません。そうではなくて、

「神様は良き者にも悪しき者にも雨を降らせ、日を昇らせ給う。こういう父の御意、これをおまえたちは体得するのだ。それでこそ、おまえは神の子だ」

と。普通の人間はできません。でも、なさったのはイエス・キリストです。キリストはこれをなさいました。十字架に付けられて、

「父よ、彼らを赦してやって下さい。彼らは自分のやっていることが分からないのですから」

と、赦しを祈って息を引きとられた。まさに責むる者のために祈られた。

ルカ伝では、

「われ更に汝ら聴くものに告ぐ、なんじらの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、汝らを誼う者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ」（ルカ6・27～28）

人間関係がうまくいかないときは、私の経験でも、直接的に仲直りしようと思っても無理です。そうではなくて、祈るのです。宇宙衛星ならぬイエス・キリストに祈る。そうすれば、そこから流れて行く。

「どうもあの人との間がうまくいきません。言葉をかければかけるほど変になります。もう万策つきました。主イエス様、人の心を動かし給うのは、あなたです。あなたは人の心を動かして下さるお方です。どうぞ、仲直りさせて下さい。私も



ひどいことを言ったかも知れませんが、あの人もひどいことを言いましたから。お互いに喧嘩けんかになりました。しかし、私は仲直りしたい。だから、主よ、どうぞ、私の罪を赦し、また、あの人と仲直りをさせて下さい。心を和らげて下さい」

このように祈りましたら、三日ぐらいして御覧なさい。電話がかかってきたりする。それでうまくいく。ぜひ、これもやってみて下さい。特に親しい者、家族など、よけいメンツがあつて、なかなか仲直りできない。職場でもそういうことがあります。旦那さんとの間でもあるでしょう。そういうときは、天に向かって祈る、執り成しを祈ることをしてください。そうしたら、上からちゃんとやって下さいます。

「なんじら人に為せられんと思うごとく、人にも然しかせよ。……汝らは仇あだを愛し、善をなし、何をも求めずして貸せ、さらば、その報むくいは大いならん。かつ至高いとたかきものの子たるべし。至高者は恩を知らぬもの、悪あしき者にも仁慈なまけあるなり。汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ」（ルカ6・31～36）

ルカ伝の方がくれていますでしょ。マタイ伝は莊重おもむきな趣があります。ルカ伝は「慈悲」などと、非常に柔らかい。

● 祈り

それから、マタイ伝の有名な言葉は、

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出みいださん。門を叩たたけ、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。

主イエス様に求めて下さい。そうしたら、このようになっていきます。

……さらば凡て人に為せられんと思うことは、人にも亦またその如くせよ。これは律法おきてなり。預言者なり」（マタイ7・7～12）

黄金律おうごんりつと言われているところです。マタイ伝6章に、「主の祈り」というところがあります。はじめの方は、

「隠れた処で祈りなさい。人に見せびらかすようなものではない」

と、言われました。それから、

「くどくどと言葉を繰り返さなくても大丈夫だ」

と、言われました。

「汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要な物を知りたもう。だから、次のように祈りなさい。『天にいます我らの父よ、願わくは御名みなの崇められん事を。御国みくにの来たらんことを。御意みこころの天のごとく地にも行われん事を。我らの日用かての糧かてを今日も与え給え。我らに負債おひめある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。我らを嘗試こころみに遇あわず、悪より救い出したまえ』（マタイ



6・9（13）

赦しということをとて主は大事になさっています。

「我らに負債のある者を赦しましたように、私たちのあなたに対する負債も赦して下さい。人を赦さなければ、神様もお前を赦して下さい。お前は神様に無条件に赦されたのではないか、だから、あの人も赦してやりなさい」

と。イエス様はこのことを大事にされて、次に、

「汝ら、もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給わん。もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給わじ」（マタイ6・14～15）

ルカ伝の「主の祈り」は、簡単になっています。

「父よ、願わくは御名の崇められん事を。御国の来らん事を。我らの日用の糧を日毎に与え給え。我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給え。我らを嘗試にあわせ給うな」（ルカ11・2～4）

「日用の糧を日毎に与え給え。一日の苦労は一日で足れり。その日、一日分の力をいただきなさい。明日のことは明日でよい」

と。ありがたいことです。

最後に私の大好きなヨハネ伝15章です。1節に

「我は真の葡萄の樹」

とあって、

「我に居れ、さらば我なんじらに居らん」

とあります。キリストは自分を葡萄の樹にたとえられた。そして、あなた方は枝だと。葡萄の樹と枝はがつちりつながっています。そうすると、根っ子から流れて来る樹液は葡萄の枝に流れ、ふさふさとした葡萄の果を結ぶ。

枝が葡萄の樹から離れて独り立ちをしてしまったら、枝は枯れますから、果を結べない。そういう自然の姿から、キリストはおっしゃったわけです。

「私は葡萄の樹、あなた方は枝だ。だから、枝が樹にいなかったらどうなるか。自分では果を結ぶことができではないか。あなた方もそうだ。私にしっかりと結びついていなさい。そうすると必ず果を結ぶから」

と。

「人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。

必ず結ぶ。

汝ら我を離るれば、何事をも為しあたわず」（ヨハネ15・5）

クリスチャンはもう、本当にキリストにしがみついてないと、クリスチャンがこの世に舞い戻ったら、中途半端なのです。なまじ、神様の世界を知ってしまったばかりに世の中で徹底的に悪いこともできない、世の知恵も使いこなせない、神様の方にも付けない。中



途半端、これが一番困る。無用の長物として、世の中に捨てられています。だから、徹底的に私にくつついていなさい。あきらめなさいよ。もう諦めて私に従って来なさい」

と言うことです。ところが、

「私に従って来たら、すごいよ」

と。

「汝ら、もし我に居り、わが言なんじらに居らば

言が化体すれば、受肉すれば、

何にても望みに随いて求めよ、さらば成らん」(ヨハネ15・7)

主イエス・キリストと心が通じていれば、

「どんなことでも願ってごらん。その願いはきかれる。その願いはわがままな願いではないから、身勝手な願いではないから、きかれるよ」

と。

「なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし。而して、汝らわ

が弟子とならん」(ヨハネ15・8)

自分一人の栄光なんてたいしたことはない。神様が栄光を受けて下さる。こんなうれしいことはないですね。

私の存在を神様が喜び給うて、私の為すことによつて神様が栄光を受けて下さる、こんな張り合いのあることはない。同じ人生ならば、そういう人生でありたい。だから何か、希望が沸いてくる。

それまでの私は、

「この世に生まれて来てすみません」

という思いでした。太宰治ではありませんが、生まれてきてすみませんと。いつも悪いことばかりして人に迷惑ばかりかけて、うなだれて生きていました。ところが、このごろは希望満々ということになってしまいました。これはこのヨハネ伝みたいなのです。主さまの御業なのです。

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。なんじら、もし我が誠命をまもらば、わが愛におらん、我わが父の誠命を守りてその愛に居るがごとし。我これらの事を語りたるは、我が喜悦の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。」

誠命というと、ちよつと恐ろしいのですが、

我が誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく、互に相愛せよ」(ヨハネ15・9

12)

これが誠命だと。ただ一つの誠命、キリストのただ一つの言葉、



「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり。我が汝らを愛せしごとく、
汝らも互いに相愛せよ」

と。この愛の誠命ただ一つなのです。

「汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選び。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。これらのことを命ずるは、汝らの互いに相愛せんためなり」(ヨハネ15・16～17)

十字架にお懸かりになる前のお別れの言葉です。

「われ神の子の名を信ずる汝らに此等のことを書き贈るは、汝らに自ら永遠の生命を有つことを知らしめん為なり」(ヨハネ前5・13)

「あなた方はすでに永遠の生命をもっている。そのことを知って欲しい」

と。もうすでにいただいているというのを、確認している。これからではない、すでに生命がきている。そのことをしつかりと認識して下さいということなのです。

「我らが神に向かいて確信する所は是なり。すなわち御意にかなう事を求めば、必ず聴き給う。かく求むるところ、何事にでも聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事をも知るなり」(ヨハネ前5・14～15)

「必ず聴き給う」と知つたら、

「祈ったことはもうすでに聴かれたり」

ということになるのだと。これなのです。百卒長がそうですね。

「お言葉を下さい」

と、お言葉をいただいたそのときに治っていた。家に帰ってみたら、治っていました。我々が祈りますね。そのとき、

「もうこれは聴かれた」

と、信じるのです。この地上では結果は出てこないかも知れませんが、それでよい。我々が祈ったことはみなキリストの御懷の中で聴かれています。福音書の中でキリストがなさった御業は、みな徴です。神の国が到来したときに成る現実を現して下さいました。我々に神の国はこんなものだということを教えて下さいました。だから、私たちはこの地上に生きながら、私たちの生命は父の御旨の中に、御懷の中に抱かれて隠されてあるという二重構造なのです。だから、いつも天国をこちらに引き寄せながら、私たちはキリストの御力で活かされながら生きています。

「この人を癒して下さい」

と手を置いて祈ってもすぐには癒えません。では祈らないのか、祈るのです。

「主よ、癒して下さいたことを感謝いたします」

と祈る。キリストの御懷の中でこの人は癒されている。それが即刻、その場で現れている



のが福音書の世界です。我々の方は、

「祈ったことは神様の処に貯えられてある」

と、思っています。

「天に宝を貯えよ」
たくわ

とおっしゃいました。祈りの宝を貯えて下さい。いろいろな人の為に一生懸命祈って下さい。その祈りは決して無駄ではありません。それは、

「氣落ちせずして常に祈るべきことをたとえにて語り給う」（ルカ18・1）

とあります。友だちだからといっても、いつペン寝床に入ったら、友だちがパンをくれと言っても起きて来てくれません。しかしあまりに願うので、

「友なるによりては起ちて与えねど、求めの切なるにより、起きてその要する

程ほどのものを与えん」（ルカ11・8）

とあります。

こうなりますと、現実に見ゆるところで、祈ったことが成っているか成っていないか、そんなことはもうどうでもよいのです。祈り続けることが大事。祈り続けることを通していよいよ主イエス・キリストと交わりが深くなっています。内的に主さまと一つの思いになっていきます。それが大切であります。

この世の地上でどういう姿であろうと、所詮、この世は仮の世であります。最後のものではありません。みくに御国が最後のものですから。そのときに私たちの本当の姿が現れてきます。いろいろな人のために祈ったその人たちが天国で待っているかも知れません。それで、

「かく求むるところ、何事にでも聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事を

も知るなり」（ヨハネ前5・15）

ということです。

「見ずして信ずる者は幸いなり」

とおっしゃいました。百卒長のように「はい」と受けとつて進んで行く。そうすると必ず、良いことが起きてきます。試練でありましでも、いろいろなところに行くときでも、必ずそれは光の中に包まれて行きますから。さきほどの285番の讃美歌が本当に私たちの人生の歌です。

「主よ、御手みでもて引かせたまえ、ただ我が主の道をあゆまん。

いかに暗く険しくとも、御旨みむねならば我いとわじ。

力頼み、知恵にまかせ、我と道を選びとらじ、

行く手はただ主のまにまに委ねゆだねまつり、正しくゆかん。

主よ、飲むべき我が杯さかずき選えびとりて授けたまえ。

喜びをも、悲しみをも満たしたもうまにぞうけん。」

喜びも苦しみも悲しみも、全部主イエス様と一緒にだつたら、どんなことだって耐えられま



す。主と一緒にいて下されば、常にそこが天国です。主のいらっしゃる処が天国です。人は環境を変えれば、天国になると思いますが、そうではありません。自分の今置かれている処、牢屋だろうと、なにだろうと、そこに主がありありと来てくだされば、そこが天国です。

まだまだ本当に語り尽きない思いますが、ずいぶん時間も超過してしまいました。お疲れの方もいらっしゃるかも知れませんが、めったにお会いできませんので、今日の2時間ほどの時間を永遠の時として覚えていただければ幸いです。どうぞ、このプリントを大事にしてください、これによって皆さんの人生を本当に明るく力強く生き生きと喜びにあふれて生きていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

● 祈り

主イエス・キリスト様、今日は本当にありがとうございました。初めてお会いする方もいらっしゃいますのに、何かそんな思いがせずして、本当に心が通い会う思いで、ここで話させていただくことができました。どうぞ、ここに集われたお一人おひとりに、あなた様がじかじかに現れて下さって、

「我、汝を愛す。汝は我が者なり。汝、我が中に在れよ」

と。主よ、どうぞ、愛の生命の御言を日ごとと呼びかけて下さって、またその御声に促されて、これからの人生をどうぞ、勝利の人生を歩んでいかれますように、こいねがい奉ります。また、いろいろ労しておられる裾野キリスト召団が、小さき群れでありましても、

「恐るな、御国を賜うことは父の御意なり」

と、この御言に支えられて、本当に愛の召団として、この世ならざる愛の御国をここに建てていつて下さるように、あなた様が豊かにお宿り下さいますように、お願い奉ります。この一時を感謝し、御名にあつて祈り奉ります。アーメン。

「聖書入門講演会「聖書と日常生活」1994年クリスマス、裾野キリスト召団発行より転載」

